

作業療法と医療福祉

Relationship between Occupational Therapy and Medical Welfare

福意 武史*1

Takeshi FUKUI

要 約

医療福祉と名のつく大学として川崎医療福祉大学が1991年に開学してから、わが国では医療福祉の名称をもつ大学や学部・学科が多く生まれ、医療福祉という言葉は一般用語としても使われるようになった。しかし、その概念は、必ずしも共通していない。本稿では、まず、医療福祉の概念について、川崎医療福祉大学関係者の思想と福祉の概念をもとに整理した。

そして、作業療法と医療福祉の関係を考えるために、作業と作業療法の概念をまとめた。その内容は、作業について、健康と作業の関係について、作業療法の定義について、作業療法の現場についてとした。

最後に、先達の作業療法の思想と実践を紹介した。そして、作業療法の医療福祉的観点について見つけなおした。

1. はじめに

1991年（平成3年）4月、川崎医療福祉大学は、わが国で初めて、医療福祉の名称を掲げて開学した。その後、医療福祉の名称をもつ大学や学部・学科がかなり生まれ、医療福祉という言葉は一般用語としても使われるようになった。しかし、その概念は、必ずしも共通していない¹⁾。

大田²⁾は、「医療福祉とは何かを考える場合、関係者がさまざまにあるいは自由に考察を続けていき、創りあげていく以外に方法はない」としている。また、江草³⁾は、「医療福祉についての見解は百家争鳴でよいが、その多様性はやがて一致させるべきである」という。そして、2007年（平成19年）、川崎医療福祉大学と川崎医療福祉学会において、「医療福祉を考える」という基本テーマのもとに、シンポジウムの開催及び学会誌特集号の発行という2つの作業が始まった。

筆者は、2009年（平成21年）12月に川崎医療福祉大学で開催された「医療福祉を考える第3回シンポジウム」の中で、「医療と福祉の連携」という発言に対して、「医療は福祉実現のための1つの手段で、

連携と表現するのは少し違う気がする」と胸のうちを表した⁴⁾。そこで、本稿を進めるに当たり、まず医療福祉の概念について整理したい。以上のような背景から、方法は、その名称使用を創始した川崎医療福祉大学関係者の思想をもとに整理するやり方が妥当であると考えた。

2. 医療福祉という概念の整理

川崎学園の創立者である川崎祐宣は、1970年（昭和45年）に川崎医科大学が開学した当初から、医療福祉という言葉と概念を抱き使用していた。川崎のいう医療福祉は、「医療を中心とした福祉」から出発したが、後に「医療も福祉も根は同じで、それは基本的に福祉である」という認識に変わっていったという。つまり、医療自体が、本来的に福祉（人の生活）として捉えられなければならないというものである¹⁾。

川崎と共に歩んだ江草³⁾は、「医療と福祉は同根であり、並立するものではなく連続するものである。医療も福祉も人類の幸福のために存在する。医療福祉は、医療と福祉の統合・融合というさらに上位の

*1 川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科
(連絡先) 福意武史 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: fukutake@mw.kawasaki-m.ac.jp

概念であり、人間の尊厳を確かなものにするものである」という。このように、両者の思想は、合い通じるものがある。

次に、医療福祉を目標の観点から整理したい。岡田¹⁾は、「本学の唱える医療福祉とは、人をどうみるかという視点からの主張である」という。そして、江草³⁾は、「医療福祉の目標は、人間の尊厳、すなわち一人ひとりの独自のであり実存的な生活・存在を確立することである」という。両者の意見をまとめると、「医療福祉とは、人を独自のであり実存的な主体と捉え、その生活や存在を護り高め、人としての尊厳を確立するものである」と解釈できよう。

以上より、「医療福祉とは、人の尊厳、すなわち一人ひとりの独自のであり実存的な生活・存在を確立するために、福祉と医療が連続的に統合・融合した上位概念である」と整理できるように思われる。しかし、ここで今一度、整理しなければならないのが福祉という概念である。福祉という言葉は日常的に使われるが、実際は、さまざまな人によって多様な概念で使われているからである。

一般に、福祉を幸福や幸せと同義語と捉える向きがある。また、辞書の中にも、そのように解説しているものがある。しかし、厳密に言えば、そうではないらしい。美味しいものを食べて幸せだと喜ぶが、福祉とはいわない。また、人生を振り返り幸福だったというが、福祉だったとはいわないことから分かる。

福祉の有名な定義に、ドイツの経済学者であるエルンスト・エンゲル (Ernst Engel ; 1821-1896) のものがある。それは、「福祉とは、日常生活要求の充足状況であり、また充足のための努力である」というものである。また、福祉の概念を整理するにあたり、いくつかの文献⁵⁻⁷⁾を調べた。その結果、すべての文献で共通していたのが、福祉と同義である英語の welfare を用いた解説であった。well は快いか満足な状況を表し、fare は状態とか旅路ひいては人生航路を表す語である。つまり、「福祉とは、幸せ (happy) をつかむための基盤であって、快い日常生活の状況、いわば暮しむきであり、そしてその努力過程である」とされる。この解説は、エンゲルの定義と合い通じている。

最後に、福祉の概念を踏まえて、筆者なりに医療福祉の概念をまとめる。本稿では、「医療福祉とは、独自のであり実存的な存在である人が幸せになるために、その基盤となる日常生活要求の充足状況、いわば快い暮しむきを実現させるものであり、福祉と医療が連続的に統合・融合した上位概念である」と整理する。

この思想は、作業療法のそれとも一致する。作業療法は、人を作業的存在として捉え、それぞれが主体的によりよい作業が行えるよう助け導く仕事である⁸⁾。そして、目標は、その人やまわりが自己実現でき、幸せな人生が送れるようになることである。次から、作業療法と医療福祉との関係について述べる。

3. 作業とは何か

作業療法を理解するためには、まず作業という概念について知らなければならない。本来、作業とは、含蓄のある概念で、ひとが生きるために行うすべての行為である。しかし、作業という言葉は、その用いられ方から一種独特なイメージを抱かせ、場合によっては、意味が偏ったり誤解されたりすることがある。例えてあげれば、小学校で作業と称する校庭の掃除、工事現場の作業中という看板、作業服と店舗に掲げた衣料品店などである。実際、筆者が作業療法士を志す学生に、作業という言葉のイメージを問うと、イメージされる作業名は掃除、工事、土木など労働を意味するものが多く、イメージされる形容詞はきつい、疲れる、つらいなど負のイメージが多かった^{9,10)}。

さて、わが国で作業療法という名称が公式に生まれ制度化されたのは、1965年(昭和40年)に「理学療法士及び作業療法士法」が制定された時のことである。その経緯について紹介する。1950年(昭和25年)、川崎学園にゆかりのある水野祥太郎¹¹⁾が、欧米視察の報告の一部として、日本医師会雑誌を通じてわが国に始めてリハビリテーションについて紹介した^{11,12)}。その後、医学上または行政上の欧米視察が多くなり、リハビリテーション医療の必要性が強く認識されていくことになる。そして、医療制度調査会が「医学的リハビリテーションの専門技術者の資格制度をすみやかに創設すべき」との答申を政府に提出したことなどによって、1963年(昭和38年)3月に養成校設立の予算案及び設置法が通常国会で成立した¹²⁾。同年、occupational therapy を制度として導入するにあたって、「PT (physical therapy) ・ OT 制度調査打ち合わせ会」において、その日本語訳を作業療法にするか職能療法にするかを投票によって作業療法に決定したいきさつがある¹³⁾。一方、当時の整形外科学会では、その決定以前から、いちはやく occupational therapy を職能療法という名称に定めていたという¹⁴⁾。ひとつ間違えば、公的にも occupational therapy が職能療法になっていたのである。このように、当時は occupational therapy における occupation の概念が十分理解されないまま、

わが国に導入されたことが分かる。

Occupation を英和辞典で調べると、仕事、職業、占有、などと訳される。しかし、occupational therapy における occupation はもっと広義なものである。Occupation は occupy から由来したもので、occupy は（場所を）占領する、（物を）占有する、（日時を）要する、（心を）捉える、などを意味する。すなわち、人が、場所、物、時間を身体と精神で満たすことを意味する¹⁵⁾。また、Webster's Ninth New Collegiate Dictionary によると、「Occupation is an activity in which one engages.」とある。すなわち、人を従事（没頭）させるところの活動である。そして、カナダ及びアメリカの作業療法士協会は、「作業とは、日々の生活で行なわれ、名付けられている一群の活動と課題であり、個人と文化によって価値と意味が与えられたものである。作業とは、身のまわりのことを自分で行うセルフケア、生活を楽しむレジャー、社会的経済的活動に貢献する生産活動など、人々が行うすべての営みである」と定義している。

次に、日本語の作業について考えてみよう。鷺田¹⁵⁾は、作業という言葉の由来を次のように解説している。「作」は本来、「荒木に細工を加えること（角川書店：字源より）」を意味し、現在は「つくる、いとなむ、こしらえる、など（講談社：新大辞典より）」を意味する。「業」は、「楽器を架ける板、書写の板などすべてこれを業といい、さらに転じて板をもって行う仕事の義（新大辞典より）」となった。作業は、「作」と「業」が合成された用語で「物を作る仕事」から、現在では「肉体あるいは精神を通して、ある具体的な結果を生み出すこと（三省堂：大辞林より）」を意味している。鷺田は、さらに一歩進めて、作業と生活の関係を意味の中に取り入れて、「作業とは、生活を構成しているもので、身体と精神を通して、物理的、生理的、心理的、社会的、文化的結果を生み出すこと」と定義した。筆者は、この定義は作業療法の本質をついたものであると考え気に入っている。そして、他者に作業を説く時に用いている。人の生活は作業から成り、その作業自体が意味ある結果を生む。作業療法は、人を作業が行えるように助け導き、生まれる結果の意味をさまざまな観点において価値あるものにするものだと考えるからである。

作業と類似した言葉に活動がある。活動とは、文字通り「生き生き動くこと」であり、大変漠然とした意味である。活動の主語は、人だけでなく、他の生物や自然でもある。蟻の巣作りを活動と呼ぶし、火山活動とも使う。これに対し、作業という言葉は、

人だけに用いる。また、作業は創造という意味を含むが、活動には含まれない。よって、我われ作業療法士は、作業を活動という言葉に置き換えることなく使用し、作業の本質を啓発していく必要がある。

最後に、作業の分類について述べる。作業は、食事や睡眠など万人に共通なものがあるが、人それぞれに固有なものの方が多く、その数は無限大ともいえるだろう。作業療法の世界では、前述のカナダ及びアメリカ作業療法士協会の定義にみるように、作業を人の生活における3つのキーワードで分類するのが主流である^{13,15)}。3つのキーワードとは、「生きる」、「働く（あるいは生産する）」、「楽しむ」である（表1）。「生きる」ための作業とは、固体の生存に必要な作業であり、生きるための自己維持作業のことで日常生活活動（狭義）という。具体的には、起居・移乗・移動動作及びコミュニケーションを基盤とした、食事、整容、排泄、更衣、入浴、静養と睡眠などの身の回り作業を指す。「働く」ための作業とは、社会的に必要な義務的作業であり、仕事・生産的活動という。仕事、学業、家事、奉仕活動などが含まれる。「楽しむ」ための作業とは、まさに人生において楽しみを求める作業であり、遊び・余暇活動という。レジャーや趣味、及び休息などが含まれる。なお、同じ作業でも、行う人や目的によって分類は異なる。大人の遊びは「楽しむ」ための作業だが、幼児の遊びは自らが発達するための「働く」ための作業である。また、通常の食事は「生きる」ための作業だが、会食はその目的によって「楽しむ」あるいは「働く」ための作業にもなる。人は、3つのキーワードの作業をバランスよく成就することにより、日常生活要求が充足され幸せとなるのである。

表2に作業についてまとめる。作業は、医療福祉の対象であり目的概念であることが分かる。

4. 健康と作業

人は、なぜ作業を行うのか。それは、人には、生まれながらにして作業せずにはおられないという本能があるからである。それは、作業欲あるいは作業本性 (occupational nature) と呼ばれる。菅¹²⁾・16) は、「作業欲は、食欲や性欲などと同じように、本来人間の基本的欲求の一つであるから、その欲求を阻止する時は、心身に何らかの違和をもたらすか、または障害を引き起こす。しかし、その欲求を適度に満足させると、心身の機能の調和が保たれ、健康が保持されるか、または障害の治癒機転が促進される」とする。すなわち、人は作業欲に導かれ作業を求め行う存在であり、それゆえ作業は人の健康に密接に関わるということである。そして、作業をする

表 1 鷺田による作業の分類 (文献15)

大分類	中分類	小分類	具体例		
日常生活活動 : 個体の生存に必要な作業活動	生きる	睡眠	睡眠	30分以上連続した睡眠, 仮眠, 昼寝	
		食事	食事	朝食, 昼食, 夕食, 夜食, 給食	
		身のまわりの用事	身のまわりの用事	洗顔, 歯磨き, 髭そり, 化粧, 散髪, トイレ, 入浴, 着替え, 布団敷きなど	
		療養・静養	療養・静養	医者に行く, 治療を受ける, 入院, 療養中	
仕事・生産的活動 : 社会的に必要な義務的作業活動	働く	仕事関係	仕事	何らかの収入を得る行動 (就労, 残業, アルバイト, 内職, 自営業の手伝いなど), 仕事の準備・片づけ・移動などを含む	
			仕事のつきあい	上司・同僚・部下との仕事のつきあい, 送別会	
	働く	学業	授業・学内の活動	授業, 朝礼, 掃除, 学校行事, 部活動, クラブ活動, 運動会, 遠足など	
			学校外の学習	自宅や学習塾での学習, 宿題など	
		家事	炊事・掃除・洗濯	食事の支度・後片づけ, 掃除, 洗濯, アイロンがけ, 布団干し, 洗濯物の整理整頓など	
			買い物	食料品・衣料品・生活用品などの買い物など	
	子どもの世話		授乳, おむつ交換, 幼児の世話, 勉強をみる, 送り迎え, 付き添い, 授業参観, 遊び相手など		
	働く	家事	家事雑事	整理・片づけ, 銀行・役所に行く, 家計簿記入, 車の手入れ, 家具の手入れ, 日曜大工, 病人や老人の介護など	
			通勤	自宅と職場の往復, 自宅と仕事場 (田畑など) の往復	
			通学	自宅と学校の往復	
社会参加			PTA, 地域の行事・会合への参加, 冠婚葬祭, 奉仕活動, 公共ゴミ置き場の清掃など		
遊び・余暇活動 : 自由な時間における作業活動	楽しむ	会話・交際	会話・交際	家族・友人・知人・親戚とのつきあい, デート, おしゃべり, 電話, 会食, 知人との飲酒など	
		レジャー活動	スポーツ	体操, 運動, 各種のスポーツ, ボール遊び	
			行楽・散策	行楽地・繁華街へ行く, 街をぶらぶら歩く, 散歩, 釣りなど	
			趣味・娯楽・教養	趣味, けいごごと, 習いごと, 観賞, 観戦, 遊び, ゲームなど	
		マスメディア接触	テレビ	テレビ	
				ラジオ	
			新聞	朝刊・夕刊・業界紙・広報紙を読む	
			雑誌・マンガ本	週刊誌・月刊誌・マンガ・カタログを読む	
			CD・テープ	CD・テープ・レコードなどのラジオ以外で音楽を聴く	
			ビデオ	ビデオ・ビデオディスクを見る	
休息	休息	休憩, おやつ, お茶, 特に何もしていない状態			

ということは, 人間性そのものであるということである¹⁵⁾。

健康は, 幸福とともに, 医療福祉及び作業療法の前提となる基本的な理念である。健康とえば, 病気や障害がないことと理解されがちだが, それでは障害者は一生, 健康を得ることができない。世界保健機関 (World Health Organization: 以下, WHO) では, 「健康とは, 身体的・精神的及び社会的に完全

に良好な状態であって, 単に病気や虚弱でないだけではない」と定義している。すなわち, 健康とは, たとえ病気や障害があったとしても, 心身のみならず社会的にも最大限により状態であることであり, それは人生の目標であり理想であるともいえる。

アメリカの作業療法士であるライリー (Reilly) は, エレノア・クラーク・スレイグル記念講演 (1962年) の中で, 「人間は, 精神と意志とによって活力を

表2 作業について

<p>作業とは、日々の生活で行なわれ、名付けられている一群の活動と課題であり、個人と文化によって価値と意味が与えられたものである。作業とは、身のまわりのことを自分で行うセルフケア、生活を楽しむレジャー、社会的経済的活動に貢献する生産活動など、人々が行うすべての営みである。（カナダ・アメリカ作業療法士協会）</p>
<p>作業とは、生活を構成しているもので、身体と精神を通して、物理的、生理的、心理的、社会的、文化的結果を生み出すことである。（鷺田）</p>
<p>人の生活は作業から成り、その作業自体が意味ある結果を生む。作業療法は、人を作業が行えるように助け導き、生まれる結果の意味をさまざまな観点において価値あるものにする。（福意）</p>
<p>作業には、「生きる」、「働く」、「楽しむ」という3つのキーワードの作業がある。人は、それらをバランスよく成就することにより、日常生活要求が充足され幸せとなる。（福意）</p>

与えられた両手を通して、自らの健康状態に影響を及ぼすことができる」と述べ、これを作業療法士の共通の信念であり、作業療法の根拠とした¹³⁾。両手を使用すること、すなわち作業することが人を健康へ導くという信念である。また、毛束¹⁷⁾は、「作業療法の信念は、障害の軽減への関心のみでなく、障害の存在を受け入れつつ日常生活を主体的に切り開いていくことへの関心である。そして、生活を切り開いていくための資源となるものが健康という概念である」という。

筆者は、WHOの定義に作業療法の概念を加味し

て、健康を次のように定義している。健康とは、病気でないとか障害がないといった消極的な概念ではなく、身体的にも精神的にも安定して作業が遂行でき、さらに社会的環境にも適応して役割が遂行でき、自分を発揮できる状態である。この定義は、川崎医療福祉大学リハビリテーション学科1期生が学んでいた頃から講義で用いている。

最後に、表3に菅がまとめた作業療法の奏効機転¹⁶⁾を示した。これを読むと、作業と健康との関係、及び作業の効用がよく分かる。

表3 菅修による作業療法の奏効機転（文献16）

<ol style="list-style-type: none"> 1) 作業欲は本来人間の基本的欲求の一つであるから、それを満足さすか、させないかは、心身の健康や障害に大きな影響がある。 2) 作業は、それが適当であれば、心身諸機能の活動を促進し、作業のないことから生ずる機能低下を防止する。 3) 作業は新陳代謝を増進し、食欲、便通、睡眠その他の体調をととのえ、基礎気分を快適に維持することができる。 4) 作業は、生活のリズム化を図るのに有効である。 5) 作業は、それによって、病的観念より正常観念に注意を向けることができる。 6) 作業は、病的な意志行為に向けられるエネルギーを、正常行為に置き換えることができる。 7) 作業は、支離滅裂な行動を正常な軌道にのせることができる。 8) 作業は、意志減退した患者をして、徐々に、その活動性を回復させる。 9) 作業は、患者をして、その成果をみることで、満足感を味わせ、自信をとりもどさせ、劣等感を弱めさせることができる。 10) 作業は、それによって、患者に他人との連帯感を養わせ、社会性をとりもどさせ、さらに積極的に、他人への寄与的生活を可能にさせる。 11) 作業は、一般に、感染症やその他の疾病に対する抵抗力を高める。

5. 作業療法の定義

作業療法とは何か、なぜ作業療法は作業療法というのか。この問いかけに対し、作業療法の本質について深く考えたことがない、あるいは実際に作業療法を経験したことがない人は、単に「作業を治療の手段に用いるから」と答えるのではないだろうか。筆者は、作業療法学生を通して、このことについて調査したことがある¹⁸⁾。その結果、まだ専門科目履修や実習経験が浅い2年次生では、「作業を治療の手段に用いるから」という回答が過半数であった。しかし、学習の進んだ3年次生では、「作業が障害された人に対して、作業が獲得できるようにするために、作業を治療の手段に用いるから」という回答が圧倒的に多くなることが分かった。この3年次生の回答は、対象者と目的、及び手段のすべてに、作業がテーマとしてあるというものである。

表4に代表的な作業療法の定義を示す。わが国の法定義（以下、法定義）は、1965年に制定された理学療法士及び作業療法士法のものである。この定義では、対象者を「身体又は精神に障害のある者」、目的を「応用的動作能力又は社会的適応能力の回復」、そして手段を「手芸、工作その他の作業を行わせること」としている。前にも触れたが、当時は作業療法の本質がまだ十分に理解されていない面があり、筆者はこの定義には問題のある部分があるように感じる。それは、特に手段の部分である。「手芸、工作その他の作業」としたことで作業の概念が偏らな

いか、また「行わせること」と表現したことで使役的イメージが起こらないか、との懸念である。しかし、この定義は、改定されることなく現在も用いられている。

法定義が生まれて20年が来ようとする頃、日本作業療法士協会は、協会独自の定義（以下、協会定義）を作成する作業に着手した。筆者はその頃、新人作業療法士であったが、わけがわからないまま、定義作成のためのアンケートに答えていたことを思い出す。そして、1985年に協会定義が生まれた。この定義では、対象者は「身体又は精神に障害のある者、またはそれが予測される者」とされ、法定義に予防的観点を加えた。目的は「主体的な生活の獲得」とされ、能力回復よりも大きい概念である生活をかなめにした。手段は「諸機能の回復、維持及び開発を促す作業活動」とされ、作業の具体例は挙げずに中間的目標で示している。また、最後に「治療、指導及び援助を行う」と説明しているが、これは本人への治療だけでなく、家族や他職種への働きかけもあることを意味する。なお、作業に勝る表現はないが、作業活動に変更したのは、当時の精神病院などでの不祥事の影響を反映したからである。患者に対しての使役的労働が作業として報道されたため、作業という用語が一般に労役や生産のイメージに偏る危険があるといった意見が出たのである¹⁵⁾。

次に、世界作業療法士連盟（World Federation of Occupational Therapy, 以下、WFOT）の定義を

表4 作業療法の代表的な定義

<p>理学療法士及び作業療法士法（1965年）</p> <p>作業療法とは、身体又は精神に障害のある者に対し、主としてその応用的動作能力又は社会的適応能力の回復を図るため、手芸、工作その他の作業を行わせることをいう。</p>
<p>日本作業療法士協会（1985年）</p> <p>作業療法とは、身体又は精神に障害のある者、またはそれが予測される者に対し、その主体的な生活の獲得を図るため、諸機能の回復、維持及び開発を促す作業活動を用いて、治療、指導及び援助を行うことをいう。</p>
<p>世界作業療法士連盟（WFOT）（2004年）</p> <p>作業療法士は、作業(occupation)を通して健康と幸福(well being)を促進することに関心をもつ専門職である。作業療法の基本目標は、人々が日常の活動に参加することができるようにすることである。</p> <p>作業療法士は、人々が能力を高めることを可能にするようなことをしたり、より参加しやすくするように環境を変更することによって、日常の生活に参加するという成果を達成する。</p>

紹介する。WFOTは、1952年に設立された作業療法の水準を高めるための国際的組織である。日本も作業療法が制度化された後、1972年に加盟した。WFOTは、作業療法の定義を幾度となく発展的に改定してきた¹⁹⁾。そして、今回提示したものは2004年のもので、法定義や協会定義に比べて非常に新しいものである。この定義では、冒頭で「作業療法士は、作業を通して健康と幸福を促進することに関心をもつ専門職である」と明確に謳う。目的は「日常の活動に参加することができるようにすること」とし、協会定義と同様に生活をかなめにしている。対象者は、目的の規定から「日常の活動に参加することが制限されているすべての人」と解することができる。これは、法定義や協会定義における身体障害者及び精神障害者という直接的・限定的表現とは異なり、対象者の拡がりを示すものと思われる。手段は「能力を高めることを可能にするようなこと」と「より参加しやすくするように環境を変更すること」とし、対象者と環境への2つの働きかけがあることを示している。

あと数年で、法定義が生まれて50年、協会定義が生まれて30年になる。その間、文化は、わが国においても世界においても、時の流れとともに変わった。文化は、後天的・歴史的に形成される人の生活様式の体系である。そして、人の生活を構成しているものは、すべて作業である。WFOTの定義の変遷のように、わが国においても、定義を考え直す時が来ていると思う。筆者は、作業と作業療法を追究する「基礎作業学」という学問において、今現在、学生とその作業を行っている。

最後に、3つの定義と筆者の考えを融合させ、作

業療法についてまとめたい。しかし、これは、あくまでも現時点での筆者の私見であり試行であることを強調しておく。作業療法士は、人を作業的存在と捉え、それぞれが主体的によりよい作業が行えるよう助け導き、その健康と幸福そして福祉を促進させる専門職である。作業療法は、心身の障害又は環境などその他の問題で作業が制限されている人、またはそれが予測される人に対し、日常生活活動に参加するために必要な作業を獲得することを目的に、作業を用いて治療を行い、また環境にも働きかける。

6. 作業療法の現場

人が作業を行うことを作業遂行という。そして、作業遂行を可能にするのが遂行要素である。平たくいえば、作業するために必要な機能である。作業遂行の概念図には、アメリカ作業療法協会統一用語集第3版(1994年)を土台として導いた鎌倉によるものがある²⁰⁾。その中で、遂行要素は、感覚運動的要素と認知的要素、及び心理社会的技能と心理的要素の3項目に分類され、それぞれに機能が列挙されている(表5)。当然のことながら、人が有する身体機能と精神機能、及び心理社会的技能のすべての要素が作業遂行に用いられる。言い換えれば、いかなる要素の障害も、作業遂行の障害に影響するということである。

作業療法の最たる特徴は、テーマを個々の機能や身体部位に置かず、総体としての人と作業に置いていることである。よって、作業療法の対象者は作業が障害されたすべての人であり、障害を引きおこす原因のすべてが治療対象になる。以上から、作業療法の分野は多岐にわたる。臨床分野は、障害種別や

表5 鎌倉による作業の遂行要素(文献20)

<p>感覚運動的要素 (Sensorimotor Component)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 感覚 (感覚意識, 感覚処理, 知覚処理) 2. 神経筋骨格 (反射, 運動域, 筋緊張, 筋力, 持久力, 姿勢調整, 姿勢保持, 軟部組織維持) 3. 運動 (粗大運動, 正中線交差, 側性, 両側統合, 運動調節, 行為 praxis, 微細協調/巧緻性, 視覚-運動統合, 口腔運動調節)
<p>認知的要素 (Cognitive Integration and Cognitive Components)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 覚醒水準 2. 見当識 3. 再認 4. 注意持続 5. 活動開始 6. 活動終了 7. 記憶 8. 順序統制 9. 範疇化 10. 概念構成 11. 空間操作 12. 問題解決 13. 学習 14. 汎化
<p>心理社会的技能と心理的要素 (Psychosocial Skills & Psychological Components)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 心理的要素 (価値観, 興味, 自己概念) 2. 社会的要素 (役割遂行, 対人交流, 対人技能, 自己表現) 3. 自己管理 (ストレス対処技能, 時間管理, セルフコントロール)

ライフサイクルをもとに、大きく4つに分けられる(表6)。すなわち、身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、老年期障害分野である。また、作業療法士は、臨床現場のほかには教育や研究分野、あるいは行政でも働く。筆者は、作業療法のこれからの展望についても考えている。作業療法の理論と実践は、医学のみならず、他分野でも活用できると思う。すなわち、発展的職域拡大である。具体的には、司法や生活困窮者などへの対応である。これについては、今後も、調査・研究していきたい。

作業療法の臨床では、対象者が作業を獲得することができるよう、さまざまな治療と相談援助が行われる。内容としては、基本能力、応用能力、社会生活適応能力といった3つの能力の維持・改善を図る。基本能力とは、運動機能や精神機能、及び認知機能である。応用能力とは、生きる、働く、楽しむための作業を遂行する能力である。例を挙げれば、食事や着替え、家事動作、レクリエーションや趣味などを遂行する能力である。社会生活適応能力とは、地域活動への参加の促進、就労や就学の準備などである。このほかに、家族指導など人的環境の調整、福祉用具の適用や住宅改造指導など物理的環境の調整

も行う。また、社会資源や諸制度の活用も促す。

7. 先達の作業療法

ここでは、わずかではあるが、先達の作業療法に対する思想や実践を紹介する。そして、作業療法が、いかに福祉的観点に基づいて生まれ行われてきたかを明らかにしたい。そして、作業療法と医療福祉の関係について見てほしい。

7.1. ギリシアの先達

作業が治療として用いられた歴史を遡れば、古代エジプト時代にまでおよぶとされる。しかし、最古の記録として知られるのは、紀元前600年頃のアスクレーピオス¹³⁾(Asklepios)のものである。アスクレーピオスは、せん妄患者に音楽、歌曲、演劇などを用いて鎮静の効果をあげたという記述がある¹¹⁾。

アスクレーピオスの流れを汲み、医学の父と呼ばれているヒポクラテス(Hippocrates; 紀元前460-377)は、すべての治療に身体と精神の相互関係が重要であることに注目し、これを強調した。そして、レスリング、乗馬、労働などの強度な作業を機能訓練として取り上げ、その効果を仕事へ転換していった¹¹⁾。

表6 作業療法の臨床分野

<p>身体障害 (体に障害のある人)</p> <p>対象疾患: 脳卒中, パーキンソン病, リウマチ, 脊髄損傷, 熱傷, その他</p> <p>働く場所: 病院, リハビリテーションセンター, 身体障害者更生施設, 身体障害者療護施設</p> <p>身体障害者福祉センター, 保健所, 保健センター, 職業センター, その他</p>
<p>精神障害 (心に障害のある人)</p> <p>対象疾患: 統合失調症, 躁うつ病, アルコール依存症, 神経症, 認知症, その他</p> <p>働く場所: 病院, 精神病院, 精神科デイケアセンター, 精神保健福祉センター</p> <p>精神障害者社会復帰施設, 精神障害者小規模作業所, その他</p>
<p>発達障害 (発達期に障害のある人)</p> <p>対象疾患: 脳性麻痺, 知的障害, 自閉症, 学習障害, 情緒障害, その他</p> <p>働く場所: 病院, 小児病院, 重症心身障害児施設などの児童福祉施設, 特別支援学校, 幼稚園</p> <p>保育所, その他</p>
<p>老年期障害 (老年期に障害のある人)</p> <p>対象疾患: 認知症, 脳卒中, 骨折, 変形性関節症, 廃用症候群, その他</p> <p>働く場所: 病院, 老人保健施設, 特別養護老人ホーム, 老人デイサービスセンター</p> <p>訪問リハビリテーション, 在宅介護支援センター, その他</p>

ガレノス (Galen ; 130-201) は、「仕事をするということは自然の最もすぐれた医師であり、それが人間の幸福についての要件である」と述べている。ガレノスは、治療として作業をすることを奨励し、実際に土掘り作業、農園作業、魚釣り、木工作業などを行わせた¹¹⁾。

ヒポクラテスとガレノスの思想は、はるか以前のものであるが、現代の作業療法思想に通じるものである。砂原²¹⁾ は、医学の祖である二人の業績をして、「作業療法は医療の歴史とともに古いといつてよい。医療の歴史は安静・運動の交代の歴史であるとしたら、運動すなわち作業療法ということになる」という。また、「もともと全人間的療法の色合いを持っていた作業療法は、古くから主として慢性病の治療に用いられたのである」と解説している。

7.2. フィリップ・ピネル (Philippe Pinel ; 1745-1826)

ピネルは、フランス革命の時代を生きた精神科医である。ピネルは、1793年に救済院の医長に任命される。そこには、慢性期の精神病患者や不治の男性精神病患者が収容されていた。当時、病状の激しい患者は、監禁され、鎖で拘束され、監護人の手荒な折檻を受けることが多かった⁸⁾。

そんな光景に眉をひそめる中、一人の監護人に出会う。彼は、ある時は温情をもって、またある時は断固たる態度をもってといったように、患者に人として接していた。すると、患者は、それによって状態がよくなっていくのである⁸⁾。

ピネルは、患者を鎖から解放し、彼らに作業をさせる運動を起した。そして、規則正しい作業が患者に有効な結果をもたらすこと、それぞれの患者に合った作業を提供すること、治療の対象は病気ではなくその人自身であること、を説いた。こうして、精神科領域における作業療法がピネルによって開拓された¹¹⁾。

ピネルに始まるこのような治療は、道徳療法あるいは人道療法などと呼ばれる。そして、それらは作業療法の思想的ルーツとされている。

7.3. 呉秀三 (1865-1932)

精神科医の呉は、4年間の欧州視察を終え、1901年(明治34年)に帰国する。呉が滞在していた頃の欧州は、ピネルらにより拓かれた近代精神医学が開花した時期であった。呉は、帰国後ただちに、東京帝国大学精神病学教授に就任するとともに、東京府巣鴨病院医長となる。そして、それまでの隔離、監置、拘束を一掃して、欧州式の無拘束と作業療法を具体化する仕事を始めた⁸⁾。

呉は、女性患者のための裁縫部屋を作ることから

始めた。やがて作業種目は増えていき、同じ病室で集団作業が行えるようにし、その病室は開放化された。1919年(大正8年)、巣鴨病院が移転して松沢病院になってからも、この開放治療と作業療法の実践は継続され、かつ拡大していく⁸⁾。

呉は、「吾人の精神は必ず、一定の作業を要求するものなり」という⁸⁾。この発言は、作業療法の思想を表しているものであろう。すなわち、精神病患者も我われと同じように、作業を欲する人である。よって、作業を束縛するのではなく、提供し遂行させ、その欲求を充足させなければならない。そうすることで病を治すことができる、と考えたのであろう。

7.4. 明石謙 (1934-2005)

明石謙は、わが国でも先駆けのリハビリテーション専門医であり、川崎医療福祉大学リハビリテーション学科の初代学科長でもある。筆者は、1981年(昭和56年)に川崎リハビリテーション学院の作業療法学部に入學した。当時、前述の水野祥太郎が学院長を務め、明石は副学院長であった。筆者は、明石が講義の中で、「作業療法は医学であるが、同時に哲学(philosophy)でもあり芸術(art)でもある」と作業療法の魅力を我われ学生に語っていたことを思い出す。

その後、明石は1984年(昭和59年)に水野の跡を継ぎ学院長となるが、筆者も縁あってか1987年(昭和62年)に教員として学院に戻った。そして、再び明石の講義を拝聴できる立場となった。筆者の手元には、当時、明石が講義で用いた貴重なプリントがある。その中で、明石が解説する。「人が佇立をするようになり、両手が自由に使用できるようになってから、作業を行うことが人の特性のひとつとなっている。作業(occupation)は、単なる職業ではなくて、個人の役割を果たすために十分な度合いの移動能力、個人の独立性、心理的な成熟を意味する。作業療法とは、患者が心理的、社会的十分さを元の職業と同様に、また通常的生活における患者の役割を果たせるように援助する、paramedical serviceである」と。明石は、筆者にとってかけがえのない恩師である。

8. おわりに

筆者は、作業療法士になって28年目になるが、多くの患者及びその周囲と時間を共有し、ともに福祉を追求してきた。末期癌と診断されたにもかかわらず木彫に没頭し生きつづけたAさん、入院中に学んだパソコン作業を退院後も家族の支援で続けて記憶障害を克服したBさん、失語症ですべての趣味を失うも可能な作業を探索し新たな趣味ができたCさ

ん、・・・と多くの人と作業を思い出す。

筆者は、医療福祉について、「医療福祉とは、独自ので実存的な存在である人が幸せになるために、その基盤となる日常生活要求の充足状況、いわば快い暮らしむきを実現させるものであり、福祉と医療が連続的に統合・融合した上位概念である」と整理した。そして、作業療法について、「作業療法士は、人を作業的存在と捉え、それぞれが主体的によりよい作業が行えるよう助け導き、その健康と幸福そして福祉を促進させる専門職である。作業療法は、心身の障

害又は環境などその他の問題で作業が制限されている人、またはそれが予測される人に対し、日常生活活動に参加するために必要な作業を獲得することを目的に、作業を用いて治療を行い、また環境にも働きかける」とまとめた。

しかし、それらの思想は、まだまだ経過途中のものである。今後も、臨床を通して、教育と研究を通して、作業療法の医療福祉的観点について考え、実践していくことになる。そして今回、執筆という作業を享受することができた。

注

- †1) 水野祥太郎は、1950年(昭和25年)当時は大阪市立医科大学整形外科教授であった。1963年(昭和38年)に日本リハビリテーション医学会が発足し、水野は第1回の学会長を務めている。発足にあたり同学会理事会において、日本語訳の統一を図る必要性が生じ、種々検討の結果、occupational therapy は作業療法という訳語に決定統一された。川崎学園においては、1972年(昭和47年)4月～1979年(昭和54年)3月に川崎医科大学第2代学長、1974年(昭和49年)4月～1984年(昭和59年)3月に川崎リハビリテーション学院初代学院長の重積を務め、学園の発展に大いに寄与した。筆者は、約30年前に学院の作業療法学部在籍し、水野に学んだ。
- †2) 菅修は、昭和初期から、精神科作業療法を推進した数少ない精神科医の一人である。1927年に北海道帝国大学を卒業すると、東京府立(現在は都立)松沢病院の医員となる。呉秀三(本稿7.3で記述)が去った当時の松沢病院では、作業療法は沈滞をきわめていた。そして、患者のために作業療法を実践したのである。その後、精神病院や知的障害児施設などに勤め、作業療法の重要性を世に示した。本稿に記載した菅の文章は、1975年の第72回日本精神神経学会総会にて、一般演題として発表された内容の一部である。その発表は、当時の日本精神神経学会の作業療法に対する無理解に向けたものであったという。
- †3) アスクレーピオスは、ギリシア最高の医神としてあがめられている。その座像は、左手にシンボルの蛇杖を持っている。杖に蛇の巻きついたモチーフは、「アスクレーピオスの杖」(蛇杖)と呼ばれ、医の象徴として世界的に用いられている。

文 献

- 岡田喜篤：医療福祉学の展望。川崎医療福祉学会誌，増刊号，7-16，2007。
- 大田晋：医療福祉行政と医療福祉経済。川崎医療福祉学会誌，増刊号，207-210，2009。
- 江草安彦：医療福祉の歴史と医療福祉教育論。川崎医療福祉学会誌，増刊号，3-6，2007。
- 川崎医療福祉学会・川崎医療福祉大学共催シンポジウム 医療福祉を考える<発表・発言記録>，川崎医療福祉学会，20-27，2010。
- 上田千秋：社会福祉固有の領域を求めて。社会福祉学科編，社会福祉学原論，佛科大学通信教育部，京都，16-33，1988。
- 一番ヶ瀬康子，遠藤興一，宮田和明，河野正輝，花村春樹，田端光美，小笠原祐次，大友信勝著：社会福祉入門。初版，有斐閣，東京，2-4，1986。
- 古林佐知子：“福祉”をめぐる社会方策。福祉士養成講座編集委員会編，社会福祉原論，第2版補訂版，中央法規出版，東京，72-74，1997。
- 鎌倉矩子：作業療法の世界。第1版，三輪書店，東京，1-4，7-10，37-38，2001。
- 福意武史，井上桂子，日比野慶子，妹尾勝利，伊藤智史，東嶋美佐子：「作業」に対する学生のイメージ。作業療法第13巻，特別号，370，1994。
- 福意武史：作業療法と作業 — 学生イメージを通して考える —。作業療法おかやま，第8巻，72-78，1997。
- 田村春雄，鈴木明子：作業療法総論。第1版，医歯薬出版，東京，11-43，1981。
- 矢谷令子：専門職確立の軌跡。日本作業療法士協会編，第1巻 作業療法概論，医歯薬出版，東京，88-90，1990。
- 鷺田孝保：基礎知識。日本作業療法士協会編，第2巻 基礎作業学，初版，協同医書出版，東京，16-20，33-43，52-55，1991。

- 14) 砂原茂一：新しい理学療法士と作業療法士の世界．秋元波留夫・富岡詔子編，新 作業療法の源流，第1版，三輪書店，東京，350-361，1991.
- 15) 鷺田孝保：作業療法における作業．日本作業療法士協会編，第2巻 基礎作業学，改訂第2版，協同医書出版，東京，1-17，1999.
- 16) 菅修：作業療法の奏効機転．秋元波留夫・富岡詔子編，新 作業療法の源流，第1版，三輪書店，東京，362-368，1991.
- 17) 毛束忠由：作業療法の定義．日本作業療法士協会監修，第1巻 作業療法概論，協同医書出版，東京，23-28，2010.
- 18) 福意武史，田中順子：学生は作業をどのように理解しているか — 作業療法において作業の意味するもの —，リハビリテーション教育研究，4：12-14，1999.
- 19) 里村恵子：世界作業療法士連盟の歩み．加藤信勝・竹村堅次・鈴木明子編，作業療法 — 心身障害に対するアプローチ — (上)，創造出版，東京，70-73，1990.
- 20) 鷺田孝保：作業分析と作業構造論．日本作業療法士協会編，第2巻 基礎作業学，改訂第2版，協同医書出版，東京，37-38，1999.
- 21) 砂原茂一：リハビリテーション．第1版，岩波書店，東京，95-99，1997.